ファン・アイデンティティの宣言に伴うジレンマと処理パターン

——ヴィジュアル系ファンへの質的調査をもとに——

大尾　侑子

本稿は、ファンが自らのファン・アイデンティティを宣言する際に生じるジレンマと、その処理に関する内在的ロジックを明らかにする試みである。近年、欧米圏のファン研究を中心として、「集団としてのファン」から、「ファン個人」のファン・アイデンティティへ着目する動きがある。しかし、これらは「集団 / 個人としてのファン・アイデンティティ」を無批判に同一視するあまり、両者の間で当事者が感じるジレンマや、その処理についての有益な議論を欠く。そこで本稿はヴィジュアル系バンドのファンを対象にインタビュー調査を行い、当事者がいかにジレンマを感じ、処理しているのかを検討した。結果、ジレンマ回避には、単なるファンであることの対他者的な「隠蔽」のみならず、「対抗的アイデンティティの呈示」や「内集団内他者化」、あるいは特定のファン集団をあらわす呼称の内面化を否定し、「個人としてのファン」としての側面を強調するなど、複数の戦略的な処理類型が導き出された。

1 問題の所在と本稿の目的

本研究は、「ファン fan」が自らのファン・アイデンティティ（以下では FI と表記）を宣言する際に生じるジレンマと、その処理に関する内在的なロジックを明らかにするものである。そこで今回は、対象をヴィジュアル系バンド（以下ヴィジュアル系と表記）のファンに設定しインタビュー調査を行った。この試みは 1980 年代以来、欧米圏で行われてきたオーディエンス研究（audience studies）、およびファン研究（fan studies）の系譜上にあるが、同時に近年、日本の社会学においても活発化しているファン集団研究（井上 2003; 玉川ら 2007; 河津 2009; 宮本 2011; 陳 2014 ほか）の一部としても位置づけられる。対象のイメージを把握すべく、まずは同音楽ジャンルが世間に認知され始めた 1994 年 8 月 16 日の『毎日新聞』記事を以下に引用する。

> ◇女子中高生の熱狂的な支持を集め（中略）ハードロックを演奏する“耽美系”または“ヴィジュアル系”とよばれる男性バンドが、注目を集めている。（中略）ファンの女子中高生らは、その脱日常性の世界にむしろ安らぎを感じるという。（中略）メンバーの衣装や化粧をそっくりファンがまねする“コスプレ（コスチューム・プレー）族”も台頭した。（中略）拠点はライブハウス。新宿ロフト、目黒鹿鳴館など、二百人ほどを収容する小規模の空間で、観客は強い「共同体意識」をもつという（『毎日新聞』1994 年 8 月 16 日東京夕刊 : 7）。

同記事は、さらに「このジャンルの潜在購買層は、一アーチストにつき、当初二万人から五万人は、確実に見込める」と市場規模を推定し、ファンは「雑誌、ダイレクトメールなど」の情報源を媒介に、「コスプレ集団や化粧の仕方などの意見交換」を行っていると続く。また3年後の『読売新聞』に目をやると、「『過激で怖い』イメージ覆す」という見出しが踊り、「マニアともいえる熱狂的なファンが多く、一般的には広がりにくいといわれていた」ものの、チャートの上位をヴィジュアル系バンドが占める」(『読売新聞』1997年10月23日大阪朝刊 : 3)ようになったと、世相の変化が記されている。これらが示唆することは、「ヴィジュアル系」と称される対象、およびそれを取り巻く「マニアともいえる熱狂的なファン」に対する、好奇の眼差しが存在していた（いる）ことだろう。こうした世間からの視線は、「“化粧ロック”と称していた彼らを見世物と思うなかれ。音楽的にも優れているんだそうだ」(『毎日新聞』1994年2月18日東京夕刊 : 10）といった記述からも窺い得る。以上のような素描は、1960年代から1970年代にかけて、「ファン（fan)」を「熱狂（fanatic)」する人、ないし「文化的低能者」である「他者」として扱ってきた初期ファン研究の議論と対応するものと言える。

しかし、1990年代以降、他者として把握されてきたファンが一般的なものとなるにつれ、ファンという存在への文化的承認が得られるようになったことを受けて（Gray, Sandvoss and Harrington 2007: 7)、2000年代前半頃からファン研究自体が「コミュニティ研究からファン個人を対象とした研究」へシフトする（Hellekson and Busse 2006: 23)。事実、研究動向に対応するように、この20年間でバンドと「観客」の様相、かれらを結びつけるメディアの状況は大きく様変わりし、ヴィジュアル系と、それを取り巻く観客の世界は、より一般的になったと言えるだろう。

とくに2000年代以降、インターネットを中心に、ヴィジュアル系のファンを総称する「バンギャル(＝バンドギャルの略。バンギャ、ギャとも呼ばれる)」という呼び名が生まれ、その集団内部では独自のターミノロジーが発展的に生み出され続けている。このバンギャルとは、洋楽ロックやJ-Rockなどのファン全体を指す用語ではなく、あくまでも「ヴィジュアル系ファンの女性」を特定して用いられる用語である点に注意したい。

しかしながら、「一般的」になったと言うことは必ずしも「好奇の眼差し」が消え去ったことを意味しない[1]。ヴィジュアル系に限らず、強い共同体志向のファンダムに対しては、「好奇の目」が容易に消え去ることはないだろう。むしろ、こうした視線そのものが複数のジャンルやシーンを独立したカテゴリーとして自立させるための要素となることもありうる。では、ヴィジュアル系のファンは、他者からの肯定的/否定的、あるいはそのどちらとも言えない「見世物」を見るような視線をいかに処理し、「集団としてのファン」カテゴリーへ適用されることを処理しているのだろうか。これは、当該の界に特殊な問題ではなく、従来のファン研究が対象としてきた、あらゆるファンダムに通底する普遍的な問いである。同時に、アイデンティティに関する議論とも密接に関わっている点で、社会学的な議論の射程にも含まれる。

近年のファン研究は、「解釈共同体」という枠を批判し、それでは補足できない実践を見るべく「個人としてのファン」に焦点化してきた。しかし、「個人としてのファン」とはそもそも何であり、「集団としてのファン」と、アイデ

ンティティの観点からいかなる関係性にあるのかを論じてこなかった。特に、ファン個人が「集団 / 個としてのファン」という 2 つのアイデンティティを内面化（あるいは拒絶）し分けているのかに関する議論がなされていない。さらに言えば、当事者がこの 2 つの側面を意図的に区別し、自己宣言に利用するとき、その意味を問うてこなかったと言える。つまり、先行研究は両者を同一視してきた点で再考の余地があると考えられる。

そこで本稿は、ファンが自らの FI を宣言する際に生じるジレンマと、その処理に関する内在的なロジックを明らかにすることを試みる。その際とくに、インフォーマントによる「自分は何者であるのか」という表明に付随する政治性、すなわち「自己宣言の政治 self-declared politics」（Hills 2002: 102）の概念を手掛かりとする。以下、先行研究と本稿の立場を示したうえで（2 章）、分析の対象と方法を示す（3 章）。その後、インフォーマントの語りから FI に伴うジレンマと、それをいかにして処理しているのかという内在的なロジックを明らかにする（4、5 章）。以上を踏まえ、本稿で明らかになった知見を示したうえで、今後の課題について述べる（6 章）。

2　先行研究と本稿の立場

2－1　ファンを論じる際の留意点

本章では、ファン研究の潮流について言及したうえで本研究の問題意識を先行研究に位置付ける作業を行う。まず、本稿はファンが FI を形成し、それを適切 / 不適切なものとして受容 / 拒絶する動態を問う研究である。そのため「ヴィジュアル系」、「バンギャル」といった語彙の厳密な定義は行うことはせず、むしろ、こうしたタームを前提として営まれる人々の言説実践に着目する立場を採る。

また、対象者の語りにはファン・コミュニティや音楽ジャンルに対するネガティブな語りが見られることがあるが、これは個人の体験や経験に基づく認識であり、本稿がこれを母集団全体の実態として論じるものでないことは強調しておく必要がある。「従来の研究者たちは、ファンに対する、悪い印象・固定観念を変革したいと考える傾向がある」ため、「マイナスイメージを増長させる危険のあるテーマを、研究対象からあえて、外す」（龐 2010: 166）傾向があった。しかし、外部の規範を持ち込むことによって逆に中立的なファン研究が妨害される可能性も否定できない。こうした点を考慮し、ネガティブな語りが見られた場合も、その語りを排除せず一次資料として利用した。

2－2　アイデンティティに着目する近年のファン研究

そもそもファン研究は欧米圏のオーディエンス研究の領域で発展してきた。1990 年代以降、アイデンティティの政治やジェンダーに関する問いに注目するオーディエンス・エスノグラフィーが台頭し、いわゆるエスノグラフィック・ターンが生じたとされる（Alasuutari 1999: 5）。さらに 2000 年代以降になると、「受容 / 抵抗」のパラダイム（Abercrombie and Longhurst 1998: 13-28）に代わって、新たに焦点化されたのがオーディエンスのアイデンティティであった。この潮流うけて、欧米のファン研究においてもアイデンティティの観点からファンを論じる研究が活発化する（Hills 2002; Meizei 2006; Reysen and Branscombe 2010）。この背景には、（1）2000 年代以降におけるファンの文化的立ち位置の変化という社会的要因と、（2）インターネットの登場に伴う技術的要因も大きな影響を与えていると考えられる（大尾 , 鈴木 2015）。

もちろん、このような立場が無批判に受け入れられているわけではなく、アイデンティティというタームが厳密な定義を欠くといった点から、FI への過度な着目を忌避する向きもある（ムーアハウス、岡田 2001: 7）。とはいえ、批判を踏まえたうえでなお、本稿ではアイデンティティに着目することに一定の意義があると考える。たとえば Matt Hills が述べるように、ファンダムとは分析的に選択しうるような単純な「もの things」ではなく、常に行為遂行的に主張（あるいは否認）されるアイデンティティであり、かつ文化的な働きである（Hills 2002）。Hills の議論を踏まえた池田太臣もまた、「ファンとは“その時々の状況の中で、ファンとしての自分を解釈する存在”」だと述べ、「“ファンとしての自己宣言”の問題を考える上でも、やはり、ファンとは“ファン・アイデンティティを持つ者”と定義しておくのが有用」（池田 2014: 79）であると論じている。

さらに Simon Frith（1996）は、「アイデンティティは流動的（mobile）で、「もの」ではなくプロセスであり、存在するものではなく「そうなるもの」であり、音楽制作や音楽視聴はこの「プロセスにおける自己 self-in-process」の経験を最もよく表していると述べる（Frith 1996: 109）。また吉光正絵（2013）は、日本のポピュラー音楽ファンの女性たちについて、「コミュニケーションの中で、自分を拘束する日常的な役割の固定観念や批判的な言説を交換し自分たちの抵抗の姿勢を強めていく」（吉光 2013: 273）傾向があることを指摘した。これら踏まえても、アイデンティティ（- の政治）の観点からファンを論じる意義は十分に示し得る[2]。そこで、次節ではアイデンティティという視点から本稿がいかなる立場を取るのか、より具体的に検討していく。

２－３　先行研究と本稿の立場

まず、自分が好きな音楽を他者に語る行為がアイデンティティの呈示といかに密接に関わっているのかを論じた研究に、小泉恭子（2007）がある。小泉は、日常生活で個人が好んで聴いている音楽を「パーソナル・ミュージック」、個人の音楽嗜好の位置を測る目安となるグループ共通の音楽を「コモン・ミュージック」、そして同世代に共通する音楽を「スタンダード・ミュージック」と呼び、この三層構造の使い分けの機能について論じた。

高校生を対象とした 1998 年の調査では、男子高校生がコアなヴィジュアル系バンドが好きであることを宣言することで、他者と差別化を図るさまが描かれており、パーソナル・ミュージックを他者との差異化に利用する「戦法」や、自身の私的な音楽を隠蔽するために公的な音楽が「鎧」として機能することが示されている（小泉 2007: 57）。この視点は、ファンが「集団としてのファン」カテゴリーに適用されることにジレンマを感じていることに焦点化する本稿と近接的な立場にある。

しかし、同時に、この調査はヴィジュアル系全盛期の 1998 年に行われていたことを考慮せねばならない。（1）音楽ジャンルの過剰な細分化、（2）オリコントップ 10 が必ずしもスタンダード / コモン・ミュージックとは限らなくなった現在の状況では、インフォーマントの男子高校生が述べる「バンド好きはみんなヴィジュアル系を聴いている」といった共通前提は忖度しづらい。そのため、FI のジレンマを論じるうえで、「音楽」の私的・公的度合いを基準とすることは避けるべきだろう。

くわえて、ヴィジュアル系ファンのアイデンティティに関する比較研究を行った Miyuki

Hashimoto（2007）がある。Hashimoto は、オーストリア人と日本人のヴィジュアル系ファンを対象に、質問票に基づいた構造化インタビューを実施し「日本人のヴィジュアル系ファンは、当のファンダムに対して、またそれをただただ楽しむことについてジレンマを感じていないが、一方でオーストリア人ファンのなかには、ヴィジュアル系ファンであることに問題を感じている人もいる」（Hashimoto 2007：98）と結論づけた。その理由として Hashimoto は、1990 年代以降日本で同ジャンルがポピュラーで若者文化のメインストリームだったことを挙げている。

しかし、はたして " 日本人のヴィジュアル系ファンはジレンマを感じていない " と言えるのだろうか。質問項目を用意した構造化インタビューと意識調査では、アイデンティティに関する語りの細部が捨象される可能性がある。そのため、詳細なニュアンスを把握するためには in depth interview を行うことが望ましい。従来のファン研究では、FI がファン集団への帰属感覚と密接に関わっており、それが自尊心を高めることにつながると論じられてきた（Here,Bob.,and James, Jeffrey D. 2007; Bennett, Lucy Kathryn2009; Snell, Dave.2012）。しかし FI は、かならずしも肯定的なファン・コミュニティへの帰属感覚や自己評価をもたらすわけではない。

とりわけ音楽ファンに関していえば、時代や自身が所属する集団、社会がその音楽ジャンルや、ファンにいかなる評価を下すか、といった諸要因によって内集団と外集団双方から発されるメッセージに板挟みになることが推察される。これを踏まえれば、たとえ日本でヴィジュアル系がポピュラーになろうとも、個人の FI は常に可変的なものとして自覚されるはずであり、ときとして不適切なものとしてジレンマが生じることもあると考えられる。

そこで本研究では、当人らが内集団や外集団をいかに設定しているのか、そのうえでいかなる自己宣言の政治が繰り広げられているのかについて、用いられるターム（例:「バンギャル」、「○○ のファン」、「○○-er」等）に着目するという立場を採用する。たとえば難波功士（2006）が指摘するように、「接尾辞 "-er"（… する人、… 出身者、… の関係者、… の性質を持つ人）や、愛称をつくる "-ie" などを用いて、ある a way of life を共有する人々をカテゴライズし、それを名指すための新語が生み出される例」（難波 2006: 181）は少なくない。ファンもしばしば、こうしたタームで集団的な FI を表明し、確認し合う。従来ファン研究では、分析者が「○○ ファン」とあらかじめ集団の名称を規定したうえで分析が行われてきたが、当事者による自称の語彙にこそ FI の機微が反映されていると捉えるのが、本稿の方法論的立場である。

3　対象と方法

3－1　インタビュー調査概要

本研究では研究倫理規定に則り、「ヴィジュアル系バンドのファンである / あった」という対象者 22 名（女性 15 名・男性 6 名・性自認なし 1 名にインタビュー調査を行った[3]。「性自認なし」という表記は当事者が要求した表記をそのまま採用した[4]。「オーディエンス研究において、インタビュー調査は一般的な方法のひとつ」（池上 2014: 114）であり、「メディア経験に関する語りに注目し、アイデンティティとの関係を分析するという視点」（池上 2014: 113）の有効性も指摘されている。調査期間は、2015 年 10 月 30 日から 2015 年 12 月 5 日にかけての

約1ヶ月間で、対象者1名につき1時間半から4時間ほど合計約300時間のインタビューを行った。手法は質問用紙を用いず、事前に概要のみを伝えた「半構造化インタビュー」を採用した。母集団を把握することができないため、スノーボール・サンプリングを用いたサンプル抽出を行ったが、1人のサンプルから1人ずつ紹介してもらう方法では標本に偏りが出てしまうため、複数人の対象者から複数人（1名以上、最大4名）紹介してもらうよう心がけた。サンプル抽出において特に留意した点は以下に示す。

３－２　サンプリングの留意点

まず、選択バイアスを低減するため性別に配慮した。「特定のジャンルやコンテンツのオーディエンスは、しばしば社会的集団として捉えられ」ることが多く（池上 2014: 114）、ヴィジュアル系も例外ではない。一般的にヴィジュアル系バンドのファンは「バンギャル」と呼ばれる女性たちであるが、男性の場合は「バンギャル男（＝ギャ男）」などと呼ばれる。これは、ロックバンドのファンの全般を指すわけではなく、バンギャルと同様、独自の文化を身体化したヴィジュアル系ファンの男性を指す呼称であるため、男性を対象者に含むことは正当化されるべきである。ただし、ジェンダー差がとくにFIやファン行動に影響を与える変数となる場

表1．調査対象の概要

	性別	世代	職業	出身地	好きなバンド	調査日
A	男性	20代後半	ヴィジュアル系バンドマン	埼玉県	ケミカルピクチャーズ	10月30日
B	女性	20代後半	メーカー勤務	神奈川県	lynch./MERRY/L'Arc~en~Ciel/NOCTURNAL BLOODLUST	11月1日
C	女性	20代後半	事務職	東京都	ゴールデンボンバー	11月1日
D	女性	20代後半	パフォーマー	東京都	SEX MACHINEGUNS/MERRY/陰陽座/D'ERLANGER/DIR EN GREY/defspiral/清春/hide/GACKT	11月1日
E	女性	20代後半	会社員	東京都	MERRY/MUCC/SCREW	11月1日
F	女性	20代後半	看護師	青森県	MERRY/Kra/heidi./lynch./SEX-ANDROID	11月1日
G	女性	20代前半	大学生	東京都	カルバリ →カメレオ	11月5日
H	男性	20代後半	アパレル関係	東京都	LUNA SEA/D/lynch./DEZERT/NOCTURNAL BLOODLUST/Janne Da Arc/Ruvie/ROUAGE/DELUHI/9GOATS BLACK OUT/Moran/Fatima ほか	11月13日
I	性自認なし	20代後半	アパレル勤務	千葉県	lynch./L'Arc～en～Ciel/SADS/ROUAGE/Plastic Tree/Fatima/Moran/DISH/amber gris/メトロノーム/宇宙戦隊NOIZ	11月13日
J	男性	20代前半	ヴィジュアル系バンドマン	東京都	(過去)Plastic Tree/DIR EN GREY。ただしBUMP OF CHICKEN/RADWIMPSの方が好き	11月14日
K	女性	20代前半	大学生	東京都	MEJIBRAY	11月18日
L	女性	20代前半	大学生	東京都	雑食(色々なバンドの音源を楽しむ)	11月19日
M	女性	30代前半	自営業	山口県	清春	11月19日
N	女性	20代前半	大学生	東京都	ダウト/Blu-BiLLioN	11月20日
O	女性	20代前半	大学生	茨城県	DADAROMA	11月26日
P	女性	20代前半	テレビ局勤務	東京都	摩天楼オペラ/MERRY	11月29日
Q	女性	20代前半	大学生	大阪府	MEJIBRAY/ザアザア/DADAROMA	11月30日
R	女性	20代前半	アルバイト	神奈川県	DADAROMA/ペンタゴン	12月2日
S	男性	20代後半	大学院生、ラノベ作家	千葉県	Janne Da Arc/ナイトメア/X JAPAN	12月2日
T	男性	30代前半	IT企業勤務	東京都	DIR EN GREY/Janne Da Arc/L'Arc~en~Ciel/黒夢/PIERROT/摩天楼オペラ	12月2日
U	女性	20代前半	大学生	東京都	X JAPAN/LUNA SEA/BUCK-TICK	12月3日
V	男性	20代後半	ヴィジュアル系バンドマン	東京都	Janne Da Arc/LUNA SEA/シド/the GazettE	12月5日

合、それに関する分析は別稿に譲る。

次に、世代と職業についてである。対象者は最年少の者が 1996 年生まれ、最年長が 1981 年生まれで、20 代前半から 30 代前半までをカバーした。冒頭の記事にあるように、1990 年代の後半にブームが起こり、世間に認知されるようになったヴィジュアル系というメディア経験は世代によって異なるはずである。また、ファン活動には当然ながら経済力や時間といったコストがかかり、コミットメントの度合いによってそれが増減する。そのため、立場としての職業が FI にもたらす影響が考えられるため、職業も偏りすぎないように留意した（表 1）。

３－３　想定される調査員バイアス

つぎに調査員バイアスの問題がある。ファン研究の場合、これは「当の研究者がファンでなはない場合におきるファンに対する学術的な考察に関する重大な（中略）問題」（Green et al.1998）として顕在化する。すなわち「外部者」が常に「ファンの極めて微妙な差異を持つ言説を把握することができないために、とりわけファンが記述したものがもつ繊細な意味の大半は〔分析から〕見落とされるか、無視されてしまう」（Green et al.1998）といった障壁である。またインフォーマントが、調査者をヴィジュアル系という「界」に明るくない「外部者」であると意識した場合、自己開示がより浅いものとなる可能性がある。「社会的浸透理論（Social Penetration Theory）」によれば、二者間の間で交換される情報は個人に関わる情報であり、両者の関係が深まるにつれてコミュニケーションは関係性の浅いものから、より「深い depth」ものにシフトするとされる（Altman & Taylor 1973）。これらを考慮して、対象者には分析者の立場を事前に述べ伝えた。対象者は調査者を「ウチ」の人間であると認識したうえで発言を行っているため、積極的にファンの専門用語を用いていると考えられる [5]。

３－４　分析の方法

以上を踏まえて、対象者の語りを質的データとして分析を行う。その際に、重要な用語に関する説明を加えておく。本稿で用いる「集団としての FI」とは、特定のファンカテゴリーに規範的に求められる価値体系や振る舞いを自己に適応された際に、そのカテゴリーを自己のアイデンティティとして受容する場合の FI を指す。また、「個人としての FI」は、「集団としてのファン」カテゴリーの自己適用を、不適切なものと判断し、これを拒絶したり否定したりする場合の自身の FI の解釈、と暫定的に定義する。

次に、4 章からの展開を述べる。まず、「集団的な FI」の自覚に関する語りを抽出し、FI を構成する際に重視されている要素を明らかにする（4-1）。次に、他者からの視線を受けて、「集団としてのファン」カテゴリーに適用されることを拒む語りを参照する。その際、対象者が「集団としてのファン」カテゴリーへの適応を拒絶しながらも、自身のファンとしての有り様を解釈する存在として、「個人としての FI」を前景化させるロジックを検討する。以上から、「集団 / 個としての FI」のあいだにジレンマが生じている様子を析出する（4-2）。

第 5 章以降では、ヴィジュアル系ファンの FI に関するジレンマがどのように対処されているのかを、他者からの視線への対応という軸を踏まえた処理パターンとして類型化していく。第一の類型は、「集団としての FI」を受容しながらも、相互行為の相手や場所など状況志向的に印象操作を行い、「パッシング passing」

（Goffman 1964）をする傾向がある対象者（＝①【状況志向的パッシング型】）。第二の類型は、「集団としての FI」を自覚しており、かつ他者に対してこの FI を肯定的に表明する傾向が見られる対象者（＝②【積極的解釈による予防線型】）。第三の類型は、「集団としての FI」を不適切なものとみなしながらも、「友人とのカラオケ」「バンド活動」などの人間関係ツールとして、他者にファンであることを開示する対象者（＝③【コミュニケーション・ツール型】）。第四の類型は、「集団としての FI」を不適切とし、カテゴリー適用されることを拒絶するもので、代わりに「個人としての FI」を強調したり、「ヴィジュアル系」以外のカテゴリー適用を強調するといった類型である（＝④【対抗的アイデンティティ呈示型】）。最後の類型は、①から④すべての対象者に当てはまるジレンマの処理パターンとして、同じファンダム内部でも、「よくない（不適切な）ファン」を他者化し、ファンのカテゴリーから排除するという処理類型である（＝⑤【内集団内他者化型】）。

4　ファン・アイデンティティの自覚とジレンマ

4－1　集団としてのファン・アイデンティティ

本節では、当事者の「集団としての FI」について検討を行う。インタビュー結果、22 名のインフォーマントのうち 21 名に「ヴィジュアル系のファン」であるという自覚があり、さらに 21 名中でバンギャルという FI がある（あるいは過去に持っていた）者は 14 名だった。

この自覚には、世代の変数も効いていると考えられる。たとえば現在、30 代前半の女性 M は、自身の中学・高時代を振り返ってこう語っている。「（当時は）バンギャって言葉は聞いたことなかったですね。SLAVE（LUNA SEA のファン）とか、ファンのグループの名称があった。ヴィジュアル系というシーンが好きな人というよりはミゼラー（MALICE MIZER のファン）とか」(M)。M の語りに見られるように、1990 年代は、「ヴィジュアル系シーン（全体）が好きな人」を指す「バンギャル」という言葉ではなく、個別のバンドやメンバーのファンを総称するタームが一般的だった。このように、世代間で FI を表現する言葉に差異があるとみられるが、ここではまず彼女たちが「バンギャル」という FI を自覚し、それを構成するうえで重視している要素を明らかにする。調査者が、「自身をバンギャルであると自覚したきっかけ」について質問すると、以下のような返答があった（「」後の（ ）は表 1. の対象者に対応）。

たとえば、「バンドのライブに行くようになって、服装が変化したことですかね、馴染もうとして露出度がアップして、ギャルメイクするようになった」(K)、「人目を気にせず“振り”をするようになった」(K)、「セッションバンド[6]で全通したときから。あとは仕切りを頼まれるようになった頃」(N)、「夜の仕事はじめて、（お金に）余裕できて、ライブ全通したとき」(N)、「小さい箱に行きたいと思った時、自分で色々ネットで調べるようになって」(O)、といった語りである。K のいう「振り」とは、ライブ会場でバンドの楽曲に合わせて独自の振り付けをするというヴィジュアル系文化の一つである。

以上から推察できることは、自らをそのカテゴリーに同化させるために価値体系や規範を習得しようと動機付けられる、「全通」（＝全ての会場に足を運ぶこと）「自分で調べる」といった主体性が、FI を自覚するうえで重視されるということである。

なかでも代表性が高いものは、大阪出身で現在東京の大学に通う女性・Qの語りである（〈データ1〉）。

〈データ1〉［Qはインフォーマント Q、Oは調査者、《》は注釈など］
1 Q：ネットで、そうですね。はまったきっかけはそうですね。
2 O：中学ぐらい？ バンギャの自覚は？
3 Q：ありました。バンギャの言葉は覚えました。ライブ映像見てて、振りとかあるじゃないですか。その頃アメブロとかもやり始めてたので、参戦レポとか、用語のまとめサイトを見たりして覚えて。ライブにはいってなかったんですけど《笑い声》。私はバンギャだなって思ってて《中略》。高校に上がると、親もライブ行っていいよって。まあ、大学進学頑張ろうかなって《中略》、東京行きたいなってのがあったんで、《東京には大阪に比べて》ライブハウスがたくさんあるんで。

〈データ1〉の3 Qで見られるように、彼女もファン集団で用いられるターミノロジーや、会場でのルール等を主体的に習得しようとしていたことをFIを自覚した分水嶺と捉えている。3 Qにある「アメブロ」はバンドマンが発信する情報を得るためだけでなく、ファン同士の交流ツールとしても利用されていたブログツールである。

このように「バンギャル」であるという自覚には、共通言語やライブ会場での「振り」といった、ルールの主体的な習得が重視されると考えられる。この知見を補強するのが、14名のうちG、L、Qの語りである。彼女たちは、積極的にライブ会場には足を運ばないが、音源（CD等）だけは聴くファンを意味する「音源ギャ」だと自己宣言した。あるいは、「過去に音源ギャの時期があった」などと、時間軸でのアイデンティティの変遷（「バンギャル→音源ギャ」）を強調することで、当事者にとって両者が別のカテゴリーであることが示される。たとえば、Gは「今は音源ギャ」だと述べたうえで、次のように語る（〈データ2〉）。

〈データ2〉［Gはインフォーマント G、Oは調査者、《》は注釈など］
1 G：今は曲聴けるなら満足だから。「仕切り」とか、そういう熱意がない、時間もないし。その金あるなら化粧品死ぬほど買うよね、だから普通の意味でのリア充になったんだよ。
2 O：「上がった」《＝ファンをやめること》っていうこと？
3 G：上がったかというと、未だにヴィジュアル系聴くし、根本的なところはバンギャなんだよね。上がったという感覚はあんまりないかな。そっちのが楽になった。音楽は聴く、カラオケ行けばヴィジュアル系は歌うし《ただし、と留保するように / 中略》昔のギャの友達は全然会わない。

〈データ2〉は、音源を聴くだけでなく、バンギャルの友達と会う、カラオケでヴィジュアル系を歌うといった、付随するファン活動が――当人らにとって規範的に――FIと不可分のものであることを示唆する。そのため1 Gにあるような「熱意」「時間」といったコストを払うことを拒否し、「曲聴けるなら満足」である自分をバンギャルと表現するにはためらいが生じていると考えられる。

さらに特殊なパターンとしては「（バンギャル男に）なりたいけれどもなれない」という男性（S）のようなパターンがある。Sは、「V系

好きだし、ファンだけど、バンギャルとか、ギャ男というのでは、愛し方が違うなっていうのはありましたね」、「なりたいけどなれない、ジャンヌは好きだけど、でも俺がファンって言っていいのか。ファンになりきれないという意識はありました」(S) と語る。ここからは、ファンは、客観的な評価と主観的な評価の双方にさらされながら FI を形成していることがわかる。

このように、「集団としてのファン」カテゴリーが自己適用されるべきか、否かの精査は、前述のような価値体系や規範の内面化、「熱意」といった対価が基準となると考えられる。

4－2 「個人としてのファン」――「集団」にカテゴリー化されることへのジレンマ

次に「集団としてのファン」カテゴリーを受容しない場合、「個としての FI」をいかに解釈しているのかを明らかにする。たとえば Henry Jenkins（1992）に見られるように、ファンはこれまでポピュラー・テキストを領有 (appropriate) する集団、すなわち「解釈共同体 interpretive community」として描かれてきた（Jenkins 1992）。しかし、池田（2014）も述べるように、ファンとはポピュラー・テキストのみならず、「ファンである自分」を解釈する存在でもある（池田 2014）。

そこでまず参照するのが、1993 年生まれの大学生の女性・U の語りである（〈データ 3〉）。U は、【音を理解するファン／顔ファン】という対立的なロジックを持ち出す。

〈データ 3 ①〉［U はインフォーマント、O は調査者、《 》は注釈など］

1 U：音楽性を理解していないバンギャ。そういう子が多いと思いましたね、顔ファンとかマジでやだったし。（中略）他とは違う私すごいでしょ、みたいなのが嫌だったんですかね。

2 O：そういう人と同じ「バンギャ」になったという意識はなかったんだ？

3 U：ないですね。黒い服着て、ライブに行って頭振ってるという点ではバンギャだと思ってましたし、でもそういう点で、形式的なバンギャとしての行動をすることは嬉しくもあったし、誇りでもあったんですけど《間をおいて》でもな、精神的な面でバンギャでないっていうのは、誇りでした、同時に。

4 O：なるほどね。でも世間からは括られているかもしれないよね。それについてはどう？

5 U：気にしてます、すっごく。《ヴィジュアル系好きだと》言いたくないです。

かつて辻泉（2008）は、1990 年代に行った調査をもとに、ヴィジュアル系ファンは、「人と同じことはしたくない」という差異化志向が強く、同じバンドのファンだけの閉鎖的な集団形成をする傾向があることを指摘した（辻 2008: 31-32）。しかし、U は、「他とは違う私すごいでしょ」というような、差異化のツールとしてヴィジュアル系好きをアピールするファンが嫌だという。U はさらに続ける。

〈データ 3 ②〉

6 U：なんか嫌なんですよ。その人たちが思っているバンギャってステレオタイプみたいなのがあって、なんだろう、太ってて、黒い服きてて、ずかずか歩いてて、追っかけしてる子って思ってるんだろうなって思うし。そういうイメージあるじゃないですか？　そういうのが自分の好きなバンドのイメージについているのが、まず嫌ですね。

Uには、「自分が好きなバンドのイメージ」を悪くするファン、つまり彼女にとっての不適切な「集団としてのファン」と同一視されたくないという、アンヴィバレントな感情があるようだ。

次は、20代前半女性Pの語りである。1992年生まれの彼女は、全盛期を迎えていた90年代当時のLUNA SEAを知らない世代だが、2010年ごろから興味を持ちライブに行くようになったという。

〈データ4〉［Pはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］

1 P：《LUNA SEAに》完全にはまった（中略）ラルク（L'Arc-en-Ciel）と言わない自分もいい、これもね、前提としていい。GLAYっていうのは恥ずかしいから。LUNA SEA好きなほうが痛いんだよ世の中的には。でもLUNA SEAがいいなって思ってる自分がまたいい。自分の耳を評価してる。

2 O：《笑い声で同調》じゃあバンギャの意識はある？

3 P：バンギャとは思ってない。私はLUNA SEAは、別にヴィジュアル系だと思ってないし、化粧してない大人のLUNA SEAとして見てるし、普通にバンギャではない。

UやPはヴィジュアル系ファンにカテゴリー化されることを不適切であるとするが、しかし、「個人としてはバンド / 音楽のファン」であることを強調する。このタイプの語りは他の対象者にも多く見られ、とくに、「バンギャルじゃないけど一生YOSHIKIファン」(「X JAPAN」のドラマー)、というように個人としては特定のバンド、アーティストのファンであるという自己宣言にこだわる対象者もいた。

以上のように、特定の「集団としてのファン」にカテゴリー化されることを拒みつつ、他方で、「個人としてのファン」である自己を強調する様から、ファンには「集団 / 個人としてのFI」の間にジレンマが生じうることが明らかになった。次に、このジレンマがどのような内在的なロジックによって解消を試みられているのかを分析する。

5　ジレンマの処理にみられるパターン

Leary.M.R.(1995) によれば、自己に対する意識は他者に対する印象操作の動機付けになっており、この印象操作への動機付けが高まると、我々は次に具体的な印象操作の方法を考える「印象構築 impression construction」の段階に移行するという。ここで影響しているのは、(1) 自己概念、(2) 望ましい / 望ましくないアイデンティティ、(3) 役割、(4) 自己呈示の相手となる人間の価値判断、(5) 公的自己イメージの現状と望ましい姿、の5つの要因だとされる（Leary 1995; Leary & Kowalski 1990）。つまり、「印象操作によって相手に与える自己の印象の基本は、自分自身が自己をどう捉えているかにあるが、さらに、どのような存在でありたいか（ありたくないか）といったことからも影響を受ける」（守崎 2011: 42）。前述の〈データ3〉などはこの典型だろう。

これを踏まえると、ある対象のファンであると他者から見なされることが主観的に望ましいか、自己呈示の相手がファン集団にいかなる価値判断を下しているかといった要素が相まって、印象操作が行われると考えられる。今回は、対象者の語りを類型化し、FIに関するジレンマの処理が、いかなる印象操作によって試みら

れているのかを検討する。ただし、以下の分類法はあくまでも論理的な分類であり、同一人物がその時々の状況如何によって複数の類型に現れることがある。

5－1　状況志向的パッシング型

前節では、「集団としてのFI」を構成するうえで重要な要素について（4-1.）、そして「集団/個人としてのFI」に齟齬が生じた場合に経験されるジレンマについて分析した（4-2.）。本節では、こうしたジレンマがいかに処理されているのかを検討するが、その第一の類型は、「集団としてのFI」は肯定的に受容しているものの、状況によってそのアイデンティティを「パッシング(passing)」（Goffman）する、という傾向である（B, E, F, G, K, Q）。ここでは、こうした処理類型を「状況志向的パッシング型」と呼ぶ。

たとえば都内の女子大学に通うKは、大学に「パンピ（一般人）」しかおらず、偏見を持たれることを回避するためにバンギャルであることを隠している。その際、自分と彼女らを弁別するべく【V系を聴く子/ガチでパンピ】、【ギャルとかヤンキーのイメージ/お嬢様系】というロジックを持ち出す。

〈データ5〉［Kはインフォーマント、Oは調査者、《》は注釈など］

1 K：大学が女子大なんで、V系聴く子がほとんどいなくて、みんなガチでパンピなんです。言わない方がいいし、偏見持たれるし。別にライブに行く友達がいるからいいやって。《SNSに》ライブの写真とか載せたい！って思うんですけど、お嬢様系ばっかりの大学だから、前に一度「バンギャルって知ってる？」って聞いたら、「ギャルとかヤンキーだよね」って言われて、それが世間のイメージだから、彼氏にも言ってないですねぇ、ジャニヲタですら嫌がられるのに、バンギャルはホストが好きって思われそうじゃないですか？

Kは、「ライブに行く友達がいるからいい」と「集団としてのFI」を受容しつつも、「ガチでパンピ」な同級生や「彼氏」には、「偏見を持たれる」という理由でパッシングを試みている。その理由として、「世間のイメージ」を挙げており、また「ジャニヲタ（ジャニーズのオタク）でも嫌がられる」のだから、ヴィジュアル系ファンはより嫌がられる可能性があると推測している。1990年代末から2000年代初頭に調査を行った辻は、ジャニーズファンからV系ロックバンドのファンになった者は、「立場が向上した」という意識があると論じていたが（辻 2008: 32）、Kの語りを見ると逆転現象が起こっていると捉えることも可能である。

これと同様のパッシングを行っているのが〈データ3〉で登場したUである。彼女は他人からヴィジュアル系好きだと括られることに対して「気にしてます、すごく」と述べたうえで次のように続ける。

〈データ6〉［Uはインフォーマント、Oは調査者、《》は注釈など］

1 U：あと、バンギャであることとか、ヴィジュアル系っていうのが痛い（＝イタい）ものだっていうのは自覚してるので、自分の痛い趣味は露出したくないなって思ってます。

2 O：じゃあ、あえて言うとかはないんだ？

3 U：言わない、言わないですね。《自分に》嘘ついてるな、とは思いますけど、好きなものに関して嫌いとは絶対言わないんですよ。だから「X JAPANとか知らないでしょ？」と

か言われたら、「大好きですよ、来週広島まで《ライブに》行きますよ」とか言いますけど、話に出るまでは絶対に言わないです。相手が好きって言えば、自分も好きだと伝えたくなりますね。

Uは、「痛い趣味は露出したいくない」ため、他人にはそれを「言わない」が、しかしヴィジュアル系が好きであることや、オタクであることを隠していることには、どこか負い目を感じているようである。こうしたジレンマを抱えながら、好きなものについて「嫌いとは絶対に言わない」ことで「個人としてのFI」を担保し、相手の情報開示に依拠して自己呈示を変容させる。以上から、ジレンマの回避には状況志向的なパッシングというパターンが存在することが明らかになった。

5－2　積極的解釈による予防線型

次に検討するのは、「集団としてのファン」にカテゴリー化されることを受容しているが、他者からの否定的な視線が存在することを理解しているため、事前にファンであることについて積極的な意味づけを行うことで、起こりうる批判に予防線を張る方法である。例えば自分自身のアイデンティティを、「特定のバンドというよりヴィジュアル系というジャンルが好きなバンギャルよりバンギャルらしい男」だと語る20代後半男性のHは、高校生時代の様子をこう語る。

〈データ7〉［Hはインフォーマント、Oは調査者、《》は注釈など］
1H：逆に、なんでこんなにかっこいいもの《ヴィジュアル系》が評価されないんだろうって、ずっと昔から思ってたし、それこそなんか「J-Rockとか、は？」って思ってたし。高校の周りではやっぱりエルレ（「ELLEGARDEN」というバンド）とかラッド（「RADWIMPS」というバンド）とかが流行ってたけど、俺らの周りでは《ヴィジュアル系ファンが》3人いたから、数で勝てたわけよ。こっちとしてはジャンヌ（「Janne Da Arc」というバンド）とか楽器もうまいしさ、向こうも文句言えないわけ。

Hは周囲にいるファンの数や、好きなバンドの演奏技術の高さを強調することで、より主流であった「エルレ」や「ラッド」より「評価されない」同ジャンルの魅力と、ファンである自己を積極的に意味づけている。また、1998年ごろにオリコントップ10にヴィジュアル系がランクインしていたことがきっかけでファンになったという30代前半の男性Tは、次のように語る。

〈データ8〉［Tはインフォーマント、Oは調査者、《》は注釈など］
1 T：《かっこいいものをかっこいいと言えない風潮について語った後、V系バンドのように》あそこまで行きたいけど、行ききれない人が多いでしょ、いけない場合批判するしかないし。身の丈考えず、後ろ指指されてもOKな《V系の》スタンスが批判される。今は、《自分が》そういうこと考えられるから、「かっこええやん」と思えるし、ばかにしてる人もいるけど、じゃあ、お前ら何好きなの？って、どうせろくなもんないでしょ。かっこいいと思えるものに自信がついてきたんだよね。

Tは、このようにヴィジュアル系を「ばかにしている人」が、「どうせろくなもん」を好き

ではないとはずだと梯子を外すことで、ヴィジュアル系を「かっこええやんと思える」「自信がついた」という自分自身のFIを肯定する。このロジックは、「集団的なFI」を対他者的に隠蔽するのではなく、積極的にそれを価値づけることで他者の視線を無効化するジレンマ処理のパターンと言える。

5－3　コミュニケーション・ツール型

また、A、J、Vのように、個人としてはヴィジュアル系ファンという集団的カテゴリーを受容していないが、「客観的に見てヴィジュアル系のファンである」という認識を受容し、表明する者も存在した。

例えば、ヴィジュアル系バンドでベースを務めているJは「(ヴィジュアル系の音楽には)それほどハマったわけじゃない」、「後輩から声をかけられて、バンドやらないかと。一回くらいならいいかと思って」バンドを始めたという。もともと、J-POPや、BUMP OF CHICKENなどのJ-ROCKが好きだったというJは、音楽よりも「ピアスにはまりだして、かっこいいなと思って顔にニードルで開けて」、「プラの人(Plastic Treeというバンド)の見た目になりたい」と思ったと語る。

また別のバンドマンAも、「もともとはヴィジュアル系じゃない界隈でライブを始めたから、ヴィジュアル系っていう界隈はほとんど知らない状態でしばらくやってた」というが、「対バン(単独ライブではなく複数名義で共演、競演すること)相手に、お前らここら辺でやってるよりもヴィジュアル系に行ったほうがいいよって言われる機会がすごい増え」たことがきっかけで、ヴィジュアル系に転向。そして、同ジャンルのバンドのファンにもなったという。Aが当時ヴィジュアル系というジャンルを受け入れたのは、「自分の音を聴いてくれる人が増える可能性が大きい」から、つまり、他者とのコミュニケーションのツールとして、ヴィジュアル系というジャンルが適当だったからだというのである。

さらに、「バンギャとは思ってない」と語った前出のPは、現在テレビ局で音楽番組を制作しており、調査者が、「バンギャルと括られることについては？」と質問すると、次のように回答した。

〈データ9〉[Pはインフォーマント、Oは調査者、《》は注釈など]

1P：別にいいんじゃない？ 別に《ファンのカテゴリーの》大枠がそうなだけで、自分はそう思ってないし。いろんなジャニヲタがいるし、バンギャがいる。ジャニヲタもキモいし、バンギャもキモい。でも面白がられるだけましだろって。別に私が「aiko」(女性歌手)とかファンモン(「FUNKY MONKEY BABYS」というグループ)好きですとか言ったら仕事にならないし、この子としゃべりたいとも思われないと思う。

2 O：なるほど、それは音楽番組やるようになって、余計に？

3P：仕事のうちにしてしまおうと。《上司は音楽について》みんななんでも知ってるけど、《ヴィジュアル系は》おじさんとかは知らない分野だから。そこで自分が知ってたら、そこでも戦えるから。

このPのように、「集団としてのFI」を受容しているわけではないが、個人として音楽が好きであり、さらに仕事での人間関係に「ヴィジュアル系ファン」と思われることがプラスに働くためファンを公言している者もいた。また前述

のTも、「人間関係のツールとしてV系がある」と語り、Tは「自分にとって（友達と）カラオケに行く機会が大事で、一緒に行く人が知ってる曲を覚えて歌う。それで（ヴィジュアル系を）覚える。だから人間関係のツールとしてV系がある、っていう感じで、一般人と一緒に行く時は、ディル（DIR EN GREYというバンド。デビュー当時は、ヴィジュアル系バンドとして活動）は歌えないよね」と語った。

以上のように、たとえ「集団としてのファン」カテゴリーを不適切とみなしている場合であっても、それを「バンド活動」「仕事」「友人とのカラオケ」などの人間関係ツールとして認識し、他者に「ファンである」ことを開示することで、「集団 / 個人としてのFI」の間の齟齬を解消するという類型が観察された。

5－4　対抗的アイデンティティ呈示型

さらに、一定の割合で観察されたのが、「対抗的アイデンティティの呈示」という方法である。これはヴィジュアル系ファンという「集団としてのファン」カテゴリーに適用されることを不適切と見なしている場合、別のFIや呼称を積極的に用いることで印象操作を行うパターンである。たとえば、Pは〈データ4〉の次に、自身が「ジャニヲタ」であるという点を強調する。

〈データ10〉［Pはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］

1P：バンギャとかは思ってなかった。でも、今はこんだけ「摩天楼オペラ」《というヴィジュアル系バンド》も観てるんだから、客観的にはバンギャだとは思ってるけど、精神的にはバンギャじゃない。ジャニヲタの精神をもって、応援したいと思ってる《笑い声》。

2O：というと？ ジャニヲタの精神でってどういう……？

3P：普通にライブ行っても、普通に顔見てるし。うちわ振ってるのと、頭振ってるのが同じ愛情表現だとしたら、「普通に顔見たいわ」って思っちゃう。

ここで注目すべき点は、【精神的】にはバンギャではなく、【ジャニヲタの精神】をもってバンドを応援したいと思っている、という語りだろう。語りの構造を見ると、【バンギャル＝頭を振る】対【ジャニヲタ＝うちわを振る / 顔を見る】というコード化がなされており、「頭を振ると顔が見えないから、（うちわを振るように）顔を見たい」ということが含意されている。「うちわを振る」とは、ジャニーズファンがコンサート会場で、手製のうちわを振り、アイドルにアピールする行為のことである[7]。Pは「客観的にはバンギャル」にカテゴリー化されるという自覚があるが、【精神】性を持ち出すことでこれに抵抗を示している。そこで対抗的アイデンティティとして呈示されているのが、「ジャニヲタ」という自己宣言である。

これは前述の「形式 / 精神」というロジックを用いていてアンヴィバレントな状況を示したUと同一の処理パターンといえるが、これ以外にも同じヴィジュアル系ファンの内部で差異化のための語彙が存在することが分かった。これをよく表しているのが、Mの語り（〈データ11〉）である。

〈データ11〉［Mはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］

1M：私が24歳、25歳《2005,2006年頃》ですかね、この頃から「バンギャ」「ビジュオタ」「ネタギャ」「音源ギャ」とか《いう用語が使

われはじめた》。《中略》ビジュオタだよねっていうのはライブを重要視せず音源《派で、音楽について》語りたがる。オタギャっていうのは、おたくと兼業しているバンギャ。おたく寄りみたいな。

これらの語彙は、同じファン集団内部において、より詳細に自身の立ち位置を示すためにファン同士で共有されていることがわかる。また、インフォーマントに自身の自覚的な FI について自由に表現してもらうと、「表 2.」のような回答が得られた。

D、E、H、I、K、O、Q は、付帯情報を加えることで、単に「バンギャル」と表現することでは汲み取れない FI のニュアンスを表現している。たとえば、「バンギャル兼ヲタ兼舞台俳優沼」（E）という自己宣言は、「バンギャル」というアイデンティティに、「ヲタ」（オタクのこと）、「舞台俳優沼」（舞台俳優にどっぷりハマっているファン）という対抗的なアイデンティティを並列化している。これにより「バンギャル」という FI を絶対的なものとせず、いくつもある“顔”のひとつであると他者に示すことができるのである。

また、「わきまえのある暴れギャ」（K）は、通常マナーが悪いファン（“よくないファン”）というイメージが付与されることも多い「暴れギャ」（ライブ会場で激しく盛り上がるファン）という自称に、「わきまえのある」と断りをつけ、不適切なカテゴリー適用を回避していると考えられる。ほかにも、「ギャ上がりかけのヅカヲタ」（O）は、「ヅカヲタ」（宝塚のファン）という対抗的アイデンティティを呈示することで、「上がりかけ」（ファンをやめかけ）ている「バンギャル」カテゴリーの適用に伴うジレンマを処理している。

以上の語りから、「集団としてのファン」カテゴリーを適用されることを当事者が拒む場合、対抗的なアイデンティティを呈示し、別の呼称を積極的に用いることでジレンマを回避す

表 2. FI に関する自己宣言

	自覚的なFI		自覚的なFI
A	バンドマン	L	雑食のバンギャル
B	バンギャ	M	音源ギャ
C	担当狂い	N	バンギャル
D	一応バンギャル	O	ギャ上がりかけのヅカヲタ
E	バンギャル兼ヲタ兼舞台俳優沼	P	ジャニヲタ、SLAVE、オペラー
F	社会人ギャ	Q	雑食系バンギャ
G	元バンギャ	R	バンギャル
H	特定のバンドというよりヴィジュアル系というジャンルが好きなバンギャルよりバンギャルらしい男	S	ファンになりたいけどなりきれない
I	ぬるめのバンギャル	T	ゲーマー
J	V系バンド（マン）	U	運命共同体、X JAPANのファン
K	わきまえのある暴れギャ/アニヲタ/メジギャ/元レイヤー	V	バンドマン、男ファン

るという方法が用いられていることが明らかになった。特定の音楽シーンやバンドのファンであることを自覚する者は、ファン集団内部においても、さまざまな印象操作を行っているのである。ただし、集団の価値体系の外部にいる者からは、「表2」の自己宣言に表れている限界差異の意味を観察すること自体が困難だろう。そのため調査者が「厚い記述」を目指すためには、このような内部の論理をある一定のレベルで認識している必要が生じるのである。

５－５　「内集団（in-group）内他者化」型

最後に検討するのが、「集団としてのファン」カテゴリーへの適用を適切 / 不適切と考えるか否かにかかわらず、ほぼすべての対象者に観察された処理類型である。それが「自分自身もそのファン集団に内包されるが、自分は他のファンとは違う」、あるいは「自分以外の“よくないファン”を他者化して自身をそれと区別する」というロジックである。これを暫定的に「内集団内他者化」の戦略と呼ぶ。

たとえば、現在大学生のNは、自身も「バンギャル」であると述べたうえで、「私、バンギャイコールクズ、だと思ってるんです。そういう風に思っている子って多いですよ。周りでも『あー普通に戻りたい』っていう子が多いですから」（N）と語り、次のように続けた。

〈データ 12〉［Nはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］
1 N：基本的にバンギャルに信用ないんですよね。実際の知人の知人だけとつながります。だって、病んでる子とか多いと思いますよ、闇抱えてる子とか、親がDVとか。自分も病んでたときに、歌詞が《心に》響いたりとかはあったんで。

このように、Nは自分と同じカテゴリーが適用されている一部のファンに対し強い不信感を表明することで、「よくないファン」を他者として区別している。Nと同じ傾向はほかにも多くみられ、たとえばQも「わりと特殊な世界で、有名な怖い人もいたんで（中略）、結構嫌な話をすると、だいたい結構一言二言交わすと、わかるようになって、この子はちょっとやばいなっていう（中略）個人的に仲良くなるってのはしてなかったですね（中略）一線を引いたっていうか」（Q）と語る。「有名な怖い人」とあるように、200人から300人規模のライブ会場で活動するバンドの場合、ファン同士も現場で顔見知りになることが多いという。さらにGやKは、同じバンギャルであっても、自分は彼女たちとは「バンドの話しか共通点がない」「同じに思われたくないから、人にもバンギャだと言いづらい」と、「よくないファン」との間の心理的な距離感を表明している（〈データ13、14〉）。

〈データ 13〉［Gはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］
1 G：《当時は》バンドの話しかしなかったから。だって共通点ないし。大学生で勉強してる自分と《中略》中学出てフリーターやって、サクラのバイトしている人との唯一の接点がバンドだったの。紙一重のところで繋がってたの。当時はその紙一重が話すこといっぱいだったんだけど。そんな時代もあったね、みたいになっちゃうわけですよ。

〈データ 14〉［Kはインフォーマント、Oは調査者、《 》は注釈など］

1 K：《バンギャルは》頭おかしい人多いですよ。社会人でまともな人があまりいないというか、しっかりしている人が少ないんですよ。同じに思われたくないから、人にもバンギャだって言いづらい。

G と K はこのように、同じファン仲間であっても、ファン活動以外のところでは彼 / 彼女らと共通点を持たないことを強調した。さらに、メーカー勤務の 20 代後半女性 B は、自分自身に対して「（ヴィジュアル系の追っかけをしていることが）まともな趣味だと思っていないから、だから罪悪感があって、ちゃんと仕事を頑張ろうと思える」（B）とも語っている。もちろんこれはヴィジュアル系ファンの実態の記述ではなく、対象者の私見であることは留意したい。

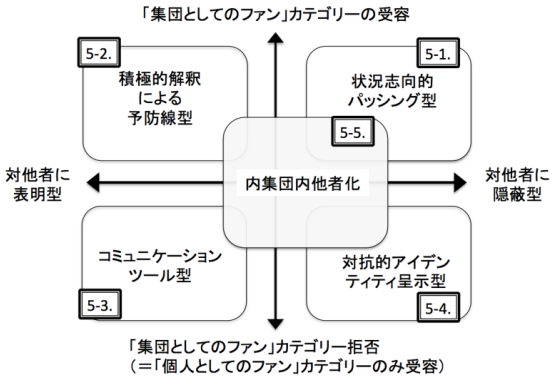
上記の「一線を引く」、「信用ない」、「同じに思われたくない」などの語りは、「よくないファン」を排除したり、自身が「よくないファン」とは異なる存在であると印象操作することによって、自身の FI を適切なものに保とうとする試みであると考えられる。

6　まとめと今後の課題

ここで、前章までの分析によって何が明らかになったのかを改めて明らかにしたい。近年の FI に着目する研究は、「ファンとは誰か」を決定するうえで「FI を持つ者」と定義することが有用だと論じている（池田 2014 ほか）。ただし分析の結果、FI とは非常に動的なものであり、ファンは状況の定義や、その時々の「内集団 / 外集団」の評価を参照しながら、対自己的な受容 / 拒絶、対他者的な表明 / 隠蔽を決定することが明らかになった。そこで生じるのが「集団としてのファン」カテゴリーを適用される際に生じるジレンマである。

今回のインタビュー調査の結果、インフォーマント 22 名のうちの大部分が「集団としてのファン」カテゴリーを適用されることになんらかのジレンマを抱えていることが分かった。具体的にジレンマを抱えていない対象者でも、「ヴィジュアル系ファン」や「バンギャル」が世間からどのように見られているか、に関する再帰的な自己観察を行っていた。これは、ファンがテクストを解釈する能動的存在であるのみ

図 . ジレンマの処理類型



ならず、「ファンである自身」を解釈する存在であることを改めて示唆する結果と言えるだろう。

また、ヴィジュアル系のファンやバンギャルといった「集団としての FI」を内面化したがらないインフォーマントであっても、「個人としての FI」については肯定的な受容をしており、むしろそれを「ファンである」というアイデンティティの拠り所として位置付けていることが観察された。

したがって、FI の自覚とは、かならずしもファン・コミュニティへの「肯定的」な所属感覚（sense of belonging to fan community）をもたらすわけではなく、むしろ「集団としてのファン」カテゴリーへの帰属を拒絶することが、かえって「個人としての FI」を担保し、それをクリーンで適切なものとして保証する機能を果たしていると考えられるのである。これは、本稿が今後のファン研究に提示しうる重要な論点である。これを踏まえ、5 章で論じたジレンマの処理の類型同士の関係性を図式化すると、「図 .」のようになる。

では、本稿の方法論的な意義はどこに見いだすことができるのだろうか。第一に、ファン研究における「厚い記述」の一環として、ファンの自称のタームに注目することの意義を主張した点である。従来のファン研究は、研究者がファン集団に所与の名称を与えた上で分析を行ってきた。しかし、当事者にとっての自称の語彙を抽出することでこそ、ファン集団の内部に通底する内在的な論理や、繊細なアイデンティティの所在を把握しうる。もちろん、この方法はヴィジュアル系という領域のみならず、他のファン集団の研究でも再利用可能な汎用性を持つ。

第二に、FI というパースペクティブからファンを対象化するとき、「集団 / 個としてのファン」カテゴリーを当事者がいかに解釈しているのかに着目する必要性を説いた点である。「ファン個人」へと研究関心がシフトしている 2000 年代以降のファン研究においても、この点は看過されてきた。

今後の課題は、インフォーマントの語りに頻出したファン集団内部の階層意識について、より詳細な分析を試みることである。インタビュー調査の段階で、彼ら / 彼女らがファン集団をサブカテゴリーに分類し、そこに上下関係を付与したり、自分が他のファンよりも優位 / 劣位であるといった認識を持っていることが分かった。なぜ特定の集団に「階層（という秩序）」があるという共通前提が忖度され、その前提のもとに相互行為が営みえるのか。この点については、本稿が試みた FI 関する「ジレンマ」と密接に関わっていると考えられるため、今回の知見との関連も踏まえたうえで別稿に譲りたい。

【謝辞】この度、お忙しいなか査読をお引き受けいただいた池田太臣先生、吉光正絵先生に、心から感謝を申し上げます。またインタビュー調査にご協力いただきましたインフォーマントの皆様には、長時間貴重なお話を伺うことができました。この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。

注

[1] 柏木恭典（2011）が述べるように、「98 年頃を境にして、ヴィジュアル系バンドメンバー自身によって、ヴィジュアル系が否定される動きが激化」（柏木 2011: 93）したり、2000 年代初頭にかけては「ヴィジュアル系への「差別」も発生し、「V 系＝見た目のみ」というイメージが固定化された。

[2] Heavy Metal ファン、通称 “metalheads” のアイデ

ンティティなどが積極的に論じられている（Dave Snell 2012; Larsson2013 ほか）

[3] 語りは、すべて調査者（筆者）個人がテープ起こしを行い質的データとして利用した。事前に、すべてのインフォーマントに対し、個人情報の扱い、発言箇所の学術利用についての同意を得た。

[4]「FtM(Female-to-Male)」や「TG（Trans Gender）」といった表記は、当事者のニュアンスを汲み取れていないということから、当事者と相談のうえ「性自認なし」という表記を採用した。

[5] 2000 年代前半から後半にかけてヴィジュアル系バンドのライブに通っていたが、2010 年を境にファンを辞める。2010 年代半ば以降、再びこのジャンルに傾倒しはじめライブに通うようになった。専門用語や会場での決まりごとなどについては、大半のインフォーマントと同程度の知識や経験があると考えられる。

[6] 公式のバンドではないが、一時的なセッションで組織化されたバンドを指す。

[7] ジャニーズのファンがうちわを振ることに対して、バンギャルの間では、手を扇子のように振る「手扇子」という動作がある。

文献

Abercrombie, N. and Longhurst, B., 1998, *Audiences: A Sociological Theory of Performance and Imagination,* London: Sage Publications.

Alasuutari, P., 1999,“lntroduction: Three Phases of Reception Studies”, Alasuutari, P., ed., *Rethinking the Media Audience*, SAGE Publications, 1-21.

Bennett, Lucy Kathryn, 2009, *The Thinking Fan's Rock Band: R.E.M. fandom and negotiations of normativity in Murmurs*. com, Cardiff University.

Altman, I., & Taylor, D,A., 1973, *Social Penetration*. New York, Hort, Einehart & Winston.

陳怡禎 , 2014,『台湾ジャニーズファン研究』青弓社 .

Frith, Simon, 1996, *Music and Identity*, edt., Stuart Hall and Paul du Gay, Questions of CULTURAL IDENTITY, SAGE Publications.

Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity,* Prentice Hall.

Gray, J., Sandvoss, C., and Harrington, L., 2007, “Introduction Why Study Fans?” , Gray, J., Sandvoss, C. and Harrington, L., eds., *Fandom: identities and communities in a mediated world*, New York: New York University Press, 1-16.

Green, S.,Jenkins,C., and Jenkins, H.,1998, “Normal female interest in men bonking”:selection s from the Terra Nosta Underground and Strange Bedfellows.In C. Harris & A. Alexander(Eds.), *Theorizing fandom: Fan, subculture, and identity*,9-38. Creeskill, NY:Hampton Press.

Hashimoto, Miyuki, 2007, Visual Kei Otaku Identity ——An Intercultural Analysis, *Intercultural Communication Studies*, XVI:87-99.

Hellekson, K., and Busse, K., 2006, *Fan Fiction and Fan Communities in the Age of the Internet*, North Carolina: McFarland & Co, Inc. Publishers.

Here, Bob.,and James, Jeffrey D.,2007, Sports Teams and Their Communities- Examining the Influence of External Group Identities on Team Identity, *Jounal of Sport Management*.21,319-37.

ムーアハウス H.F., 岡田桂 , 2001,「ヨーロッパのサッカー社会学」『スポーツ社会学研究』(9):1-12,129.

Hills, Matt., 2002, *Fan Cultures*, London: Routledge.

井上貴子 , 2003,「拡張された〈男の美学〉—— エックスをめぐって」『ヴィジュアル系の時代 ロック・化粧・ジェンダー』青弓社 .

池田太臣 , 2014,「アイデンティティとファン活動：ファンとは誰か？」『甲南女子大研究紀要 人間科学編』（50）73-81.

池上賢 , 2014,「メディア経験とオーディエンス・アイデンティティ —— 語り・パフォーマンス・エスノメソドロジー」『マス・コミュニケーション研究』(84): 109-27.

Jenkins, Henry, 1992, *Textual poachers: television fans & participatory culture*, New York: Routledge.

柏木恭典 , 2011,「ポップカルチャーとしてのヴィジュアル系の歴史」『千葉経済大学短期大学部 研究紀要』（7）89-100.

河津孝宏 , 2009,『彼女たちの「Sex And The City」』せりか書房 .

小泉恭子 , 2007,『音楽をまとう若者』勁草書房 .

Leary, M. R., 1995, *Self-presentation: Impression management and interpersonal behavior*. Boulder, CO: Westview Press.

Leary, M. R., and Kowalski, R. M., 1990, Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*. 107(1), 31-47.

Meizei, Katherine, 2006, “Be a Han, Not a Hater”:Identity Pplitics and the Audience in American Idol, University of California, *Pacific Review of Ethnomusicology*(12): 1-11.

宮本直美 , 2011,『宝塚ファンの社会学 – スターは劇場の外で作られる』青弓社 .

守崎誠一 , 2011,「自己呈示」日本コミュニケーション学会編『現代日本のコミュニケーション研究』三修社 ,40-6.

難波功士 , 2006,「“-er” の系譜：サブカルチュラル・アイデンティティの現在」『社会学部紀要』100: 181-9.

大尾侑子 , 鈴木麻記 , 2015,「近年のオーディエンス研究における「アイデンティティ」の位相：解釈学的図式に対する批判的視覚の可能性と限界」東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』（89）51-65.

龐 惠潔 , 2010,「ファン・コミュニティにおけるヒエラルキーの考察ー台湾におけるジャニーズファンを例にー」東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』（78）,165-79.

Reysen, Stephen, and Nyla R. Branscombe, 2010, Fanship and Fandom: Comparisons Between Sport and Non-Sport Fans, *Journal of Sport Behaviuor*, 33(2): 176-93.

齋藤宗昭 , 2014,「2000 年以降のヴィジュアル系ロックの歴史 —— 閉鎖状況と海外への進出」日本ポピュラー音楽学会 第 25 回 大会報告個人発表『NEWSLETTER #99』,26(1),10-1.

Snell, Dave, 2012, *The everyday Bogans- Identity and community amongst Heavy Metal fans*, The University of Waikato.

Ross, Karen and Virginia Nightingale, 2003, *Media and Audiences; New Perspectives, Maidenhead*: Open University Press(=2007, 児島和人ほか訳『メディアオーディエンスとは何か』新曜社)

玉川博章編 , 2007,『それぞれのファン研究 ——I am a fan』風塵社 .

辻 泉 , 2008,「メディアと集いの文化への視座 —— 経験的 / 批判的アプローチからマルチメソッド・アプローチへ」『文化社会学の視座 —— のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化』ミネルヴァ書房 .

吉光正絵 , 2013,「ポピュラー音楽と女性ファン」『長崎県立大学国際情報学部件研究紀要』14: 265-76.

（おおび　ゆうこ　東京大学大学院、日本学術振興会特別研究員 DC2、yuko1811@gmail.com）
（査読者　池田太臣　吉光正絵）

Solving the Dilemma of Individual and Group Fan Identity

Based on an Interview Survey of ‘Visual-Kei Fan’

Yuko OBI

This paper will consider the dilemma that arises with the declaration of fan identities. Previous studies have focused on fan identities from the perspective of fan studies. They did not differentiate between individual fan identities and group fan identities. But this difference is important and results in a dilemma when declaring and processing fan identities. In this paper, I analyze the ‘Visual-Kei (Visual Type) Fan’ and ‘Ban-Gal (Band girls)’ identities based on qualitative interviews. I argue that through the deliberate use of “fan identity as the individual” and “fan identity as the group”, fans possess processing patters that allows them to solve this dilemma.